

始めの式を行ふ。式は 御影奉拜に始まり、勅語並に昨年十一月に下し賜ひたる 詔勅を捧讀し、次で、正木〔直彦〕學校長は、詔勅の旨を躰して、職員生徒は勤儉自ら持し、自彊已まざるの覺悟を以て此新年を迎へ、奮勵努力せざるべからざる旨、告辭を述べられ、兩陛下の萬歳を三唱して式を終りたり。

○職員を送迎會 本校職員一同は、舊臘十二月十九日を以て、荒木〔寛敏〕、下村〔觀山〕、辻村〔延太郎〕の三教授及藤本〔万作〕囑託教員の先般引退せられたると、古宇田〔実〕休職教授の退營せられたるとに依り、その送迎會を催し兼て忘年會を開きたり、場所は公園内常盤華壇にして、會するもの五十名許りなりしといふ。

○本校一覽の配付 本校一覽は舊冬それぞれ配付の都合なりしも、印刷間に合はず、此程に至りて漸く出來せしを以て、例に依りて本月下旬には卒業生一般に配付せらるべし。

○職員の義捐 先般伊太利に於ける震災の慘狀救助に充つるため、本校職員諸氏は相謀り、金貳拾五圓を醸金して救濟金の中に納付したりといふ。

## 関連事項

### ① 帝国図書館敷地・建物移管

明治四十一年三月、隣接する帝国図書館敷地のうち本校敷地に喰込んでいた部分三七〇〇坪と建物三棟（煉瓦造り三階建倉庫、木造二階建閲覧室、煉瓦造り二階建倉庫）が本校所管に移された。建物の方は既に同三十九年五月に本校が帝国図書館より借用し、文庫として使用していたものである。明治四十年より文部省は本校の大規模な

改築計画に着手しており、これとの関連で敷地の移管が行われたものと考えられる。

### ② 成績品展覽會

明治四十一年三月二十九日、即ち卒業式の翌日より四月三日まで校内で成績品展覽會が開かれた。一般公開は明治三十五年以来のことであった。展示物は日本画科生徒の平常成績（写生、臨画、新案）と卒業製作および四教授の作品、西洋画科の三、四年生の平常成績（コスチューム、静物画）と一、二年生の平常成績（木炭画、静物画）、卒業期制作（随意題）、卒業制作（自画像）、彫刻科、図案科、金工科、鑄造科の平常成績と卒業制作および参考品、図画師範科の図画、手工作品（木炭画、鉛筆画、毛筆画、粘土細工、造花）および「教育的作品」、参考品（旧教官作品、明治二十六年〜同四十年彫刻科卒業制作、現職彫刻教官作品、本校所蔵古美術品、住友家依囑大阪図書館青銅額）等々でこれらが本館、新館、文庫閲覧室および書庫に陳列された。成績品の出品は六百四十五点で、そのうちの三十七点が売約となり、また、各科の即売所（絵葉書、風呂敷、手拭、ハンカチ、石膏品、裝飾兼実用品）では絵葉書が飛ぶように売れた。総入場者数は一万三千四百四十四人。一日平均二千二百三十五人の入場があった。

この展覽會で特に一般の関心を惹いたのは日本画科と設置後六ヶ月たった図画師範科で、前者については『東京美術学校校友會月報』第六卷第八号所載「我校の成績展覽會」中に次の記述がある。

新館〔下村觀山、鶴田機水指導の新館教室〕の作品は、寫生、臨

畫、新案の類で、就中寫生は從來よりも、成功したものの様であつた、又新案は、主に海波、木魂、偉麗等の課題を設けて、主觀的製作の陰氣な者が多く、拙い内にも精神のある、新館を代表した作とも云ふべきものが數點見た、主として風景畫が多かつたが、同一の畫題の下に製作しても、皆各個人の特色を發揮してゐるのは愉快に感じた。然し一目して、如何に在來の日本畫と變つた研究の方法を取つたかは、第一に知られたので、其目新しいのに、觀者を驚かし、惑はしたのは確かに事實であつた。つまり一般を通じての上に、之れが新館式だと云ふ様に、一つの畫風が認められた。

次に本館〔寺崎広業、結城素明指導の本館教室〕の作品に至ると、それが無い様である。新館の新案が、一定の畫題に依て、執筆したのに反し、各自隨意の題を選んで、各自の長所を表はし、其多くは人物畫で、風景花鳥なども見受けた。然し一般には手際の良、所謂精巧とも云ふべきものが、此館の特有な處であらう。觀者は本館の畫に對しては、別に變つた批評もしなかつたらしい。思ふに云はゞ無難の作で、多くの人に解し易いと云ふ方であつた。又此外に、有職人物寫生と、繪卷物の模寫が數點あつた。卒業製作は、新館が十一點、本館が三點で、各自獨特のやりかたで、極端に其特徴と、缺點とが表はれて居て、今迄の卒業製作に較べて、非常に相違したもので、世評も随分やかましかつた。又紙本を用ゐたのもあつたのは、<sup>〔44〕</sup>今年が初めてであらう。

この評から推して新館教室と本館教室とは作風に著しい相違があつたらしい。指導法も異なつていたようである。記者が在來の日本畫とは變つた目新しい方法を取つたと指摘する新館の作品とは一体どのようなものであつたか、今日知る術はないが、現存する卒業製作を見ると、この年の卒業製作には確かにこの指摘に符合するような特色が現われている。例えば久保提多の「屠所」は森の中の屠殺小屋に屠者が牛を引きずり込もうとする（牛の眼はギラリと光っている）。無気味な情景を油絵風の描法で描いたもので、崇高とか優美とか悲壯とか閑逸とか温雅とかいった美的情操の表出をねらつて描かれた従來の日本画卒業製作とはかけ離れている。野生司述太（香雪）の「黄泉」にしても、その陰々たる画面には觀者の心を和ませるものは何もない。こうした作品が觀衆を驚かし惑わし、やかましい世評をかきたてたことは十分考えられる。『美術新報』第七卷第二号（明治四十一年四月五日）は

「第三は日本畫の室である。『波』とか『森の木魂』とか『偉麗』とかいふのは課題と見えて多數の作品が出て居る。其他多少の卒業製作もあつたが、其の技巧、その手腕を見ては、吾等は氣の毒で面を揚げて能く通らなかつた。〔中略〕かく見過した處で何が一番深い印象を與へたかといふと、學校には氣の毒であるが實に日本畫科の劣悪なことである。少くも數年前の同科の成績を見た人は今更に暗涙を禁じ得まい。是れ一に其教授法の無主義、無定見に基づくといふものゝ、以て世の好尚の推移がトせらるゝのである。」

と、かつて無いほど強く非難したが、ここで「劣悪」「無主義」「無定見」とされているのは、前記月報記事を考え合せると新館教室のことであろう。明治三十九年教室制を実施して教師の個人的薫化に重きを置く教育を行なった結果がこうして現われたわけであるが、これは半年後の下村観山の辞任と教育法改革の一因となったと考えられる。

次に図画師範科の展示については前掲月報に左のように記されている。

◎陳列品 圖畫、手工の兩科に亘り、圖畫にては木炭畫、鉛筆畫、毛筆畫等あり。手工には粘土細工及び造花を陳列せり。尙ほ教育的作品とも稱すべき塗板畫、「スペース レレーション」<sup>「ママ」</sup>、「コムポジション」<sup>「ママ」</sup>、オブ・グループ、「スタデー・オブ・カラー」、「シルエット」等枚舉に違あらず。

◎是等の製作品は、何れも入學以來僅々六ヶ月間に成れるを以て、意に任せざりしは頗る遺憾なりしと雖も、總て教育的ならん事を期し、敢て奇を衒はず、妙に趨らず、其外觀平凡にして美術的作品として見るべきもの甚だ妙きの感あり。然も一點一畫之を忽にせず、忠實に製作に従事せしは、實に此科の特色となす。唯觀察の至らざる、或は多少の杜撰ありしならん、研究の日猶は淺きは是れ亦已むを得ざる所なり。

◎以下陳列品中、最も觀覽者の注意を惹きたる作品を挙げ、併せて之が教育的價值を説かむ。我之を言ふ、所謂我田引水、手前味噌の嫌ひ無きにあらねど、蓋し陸より船の判斷するには勝る事大

なるべし。

(1) 塗板畫 兒童の倦厭を避けて其想像力を利用し、成る可く減筆して、動物及び人體の動作等の描法を示したるものなるが、觀覽者の多くは、寧ろ一種の繪畫として、多大の興味を以て注目せしものゝ如し。

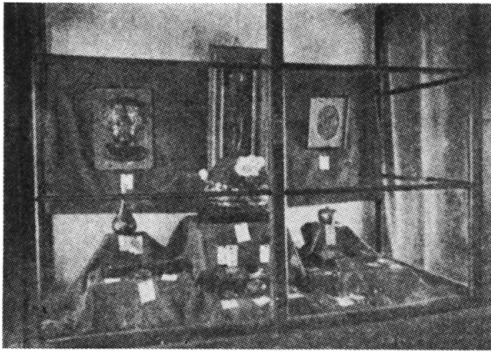
(2) 「スペース」<sup>「ママ」</sup>、「レレーション」例を無趣味なる樹皮に取りて、其一部を抽出し、「スペース」の關係に依りて、種々なる面白き畫と爲すことを得るを示せり。尙之に類したる方法を、海陸の風景に應用せる例をも挙げたり。

(3) 「コムポジション・オブ・グループ」には多くの果物を畫き、其の布置及びテーブル・ラインに對する、スペースの分ち方によりて、畫に良否の別あることを知らしめたるもの。

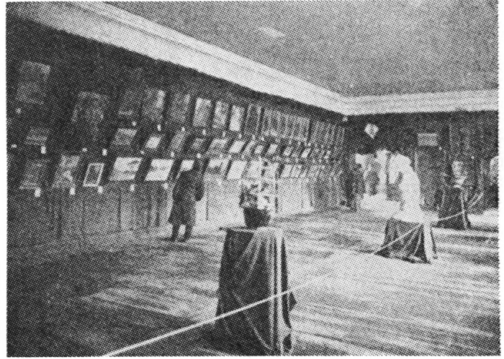
(4) 「スタデー・オブ・ヴァリユー」に於ては、材料を壘とコ



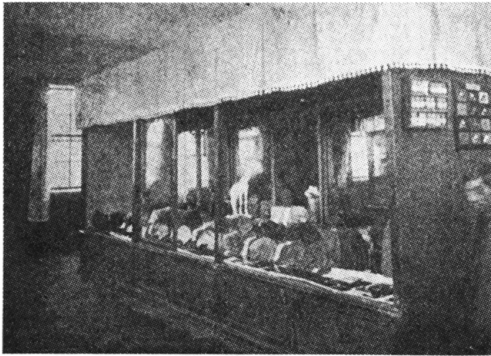
展覽會記念日本画科卒業制作陳列場  
 (『東京美術学校校友会月報』第6卷第8号より転載)



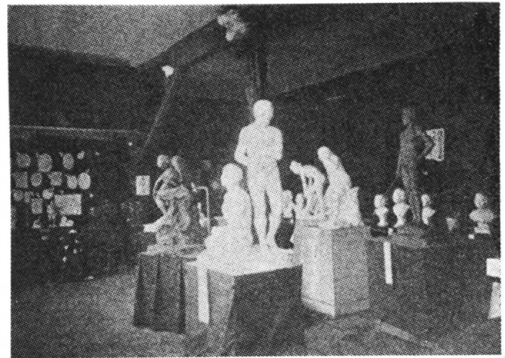
金工科陳列場



西洋画科陳列場



鑄造科漆工科陳列場



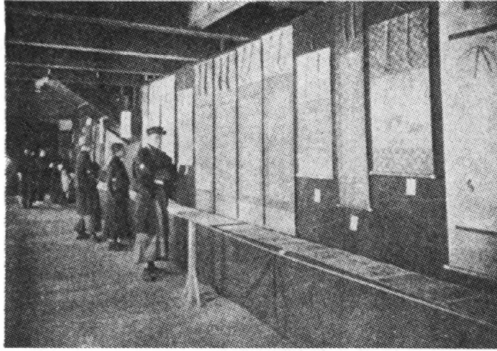
彫刻科陳列場



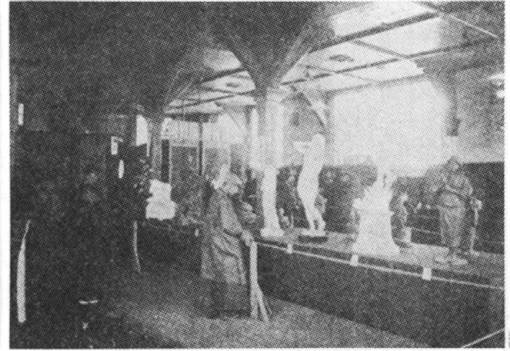
図画師範科陳列場



図案科陳列場



同 右



所蔵参考品陳列場

ップに採り、之を濃淡種々に染めて「ハーモニー」の多くの場合を示せり。

- (5) 「スタデー・オブ・カラー」色の研究は、亦圖畫科を通じて主要なる事業の一たるを以て、多くは生徒各自にて着色したる表を掲げ、寒色と熱色との對照色の強さを、黒色にて表はしたるものを始めとし、標準色、及び「チント」、「シェード」を並列せる表、原色の強さが等しき強さに至る段階、及其對照の配列等甚だ多し。
- (6) 「シルエット」兒童の技工に適し、且つ簡易の手法をもて、正確なる「アウトライン」の觀念を與ふべきものなり。

### ③ 金工科制度改正願

明治三十八年三月の本校規則大改正の際に彫金科と鍛金科が合併して金工科となつたが、合併授業に何らかの支障があつたらしく、同四十一年に同科四年生から一年生までのほぼ全員による左記のような制度改正願いが正木直彦校長に提出された。原本は墨書。本学彫金教官室保管。この嘆願書の成果を資料的に確かめることはできないが、合併授業に問題があつたことは推測できよう。大正十年ころから金工科は彫金部と鍛金部に分けて授業を行ふようになる。

#### 金工科制度改正御願

現今ノ金工科御規定ヲ改タメテ彫金科志望及鍛金科志望ノ二部ニ分チ各々其ノ一ヲ專修スルコト、シ併セテ相互ノ概念ヲ得ル爲メ二年程度マデ兼修セシメラレ度此ノ段生等一同以連署及御願候也  
明治四十一年六月八日

神谷甚一郎	堀井董
岩崎文七	佐藤省吾
蒲生鐵男	原田縫吉
チャルン・スラナート	海野清
黒川廣吉	小糸源太郎
嶋田健二	漆間宏
寺嶋恕	根尾謙児
田中賑吉	神矢教親
上杉勝徳	野口六三
三好眞長	